

福地崇生『インドネシア経済の計量
経済学的分析』アジア経済研究所、
1966. iv + 398 pp.

本書は、現状で利用可能な微視的・巨視的資料を統括使用する総合的なエコノメトリックモデルを作成して、1950年代のインドネシア経済の変動の説明と、1970年までにいたる種々の条件につき予測を行なうことを目的としたもので、日本、インド、フィリピンと続いた一連のアジア諸国経済研究の一環をなすものである。

著者は、インドネシア経済の特質として、(1) インフレーション、(2) 製造業における低操業率、(3) 供給天井型経済、(4) 輸出の停滞およびそれに付随する外貨問題、(5) 資本不足、(6) 低所得水準の諸点をあげ、これらの要素を考慮に入れたモデルビルディングを試みている。その際、「拡大法」と称される特殊な手法が採用されていることは、本書の著しい特色である。「拡大法」とは総合モデルを作成する場合、まず小規模のプロトタイプモデルから出発し、しだいに大規模なマクロモデルへ「拡大」発展させ、最後に総合モデルに至らしめるやり方をさしている。まず戦略モデル（プロトタイプモデル）を作成し、それを足がかりにして総合モデルに取り組む手法は、一般に広く知られた方法であるが、これはその特殊なかたちのものと考えてよいであろう。

本書では、総合モデルに至るまでに、二段階すなわち2個のプロトタイプモデルが考慮されている。第1のモデル（マクロモデルⅠ）は、内生変数13個の小規模なもので、二段階最小二乗法に基づいて推定されている。デフレーターが内生化されていること、民間消費が定義式から求められていること、軍事費が政府支出から独立させられていること等に特色が認められるようである。第2のモデル（マクロモデルⅡ）は、マクロモデルⅠの生産函数、投資函数、輸出函数、輸入函数、政府収入函数のそれぞれを細分化し、国際収支バランスの定義式を補充したものである。モデルは逐次決定型になるように工夫されており（その理由づけは正確でない）、推定法として逐次最小二乗法が採用されている。

総合モデルは、1個のマクロモデルと3個のサブ

モデル（マイクロモデル、輸出モデル、輸入モデル）よりなり、例えば、各サブモデルの値を積み上げれば、マクロモデルの対応する変数の値になるというふうに、これら4個のモデルは相互に関係づけられているのである。モデルの推定は逐次最小二乗法に基づいている。

この総合モデルに基づいた1960～70年の予測によれば、GDPの年平均成長率は2.96%（ただし、人口成長率は2.02%と想定されている）、輸出入はほぼ横ばい（ただし、輸出における鉱産物からその他商品への重点の移行は認められる）、赤字財政によるインフレの進行、外貨準備をプラスに保つためには外国からの援助を毎年ほぼ6千万ドルと想定せねばならないこと、等の結果が得られている。このように、本書によって提示された1960年代のインドネシア経済はかなり悲観的な様相を帯びているのであるが、その原因として、著者は、インドネシア経済における前述した6項目のネガティブな特質が相互に影響しあって一つの悪循環を形成し、それが経済成長の最大の障害となっている事実を指摘している。（この悲観的予測は、1960年代前半の実績に近く、むしろ楽観的であったといえるくらいである。）

以上が本書の概要である。少々冗長であると感じられる部分がなきにしもあらずなのだが、最終的な総合モデルへと一步一步着実に拡大発展してゆくモデルビルディングのプロセスを手取るように見ることが出来ると同時に、低開発国経済に関する計量経済学的分析の示唆に富んだ一つの例を見ることが出来るであろう。最後に、本書マクロモデルⅡにおけるモデルの安定性テストの議論が、軍事支出の経済効果の分析にも応用されていることを指摘しておこう。（T. Fukuchi, "Political Tension versus Economic Growth—the Case of Indonesia—," *Japan's Future in Southeast Asia*, Symposium Series II, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto Univ. 1966）

（江崎光男・東南ア研）